

批評・紹介

西南中國民族史の研究

——南詔國の史的研究——

藤澤義美 著

昭和四四年三月 東京 大安書店
A5判 五六六頁

本書は著者が昭和二〇年に東京文理科大学を卒業して、最近に至るまで、約二五年間、文字通り一筋に研究を續けてきた南詔の歴史的研究を主とした内容の書物である。唐代に雲南に興起し、唐代以降においても國家的命脈を維持した南詔國について、長年月の間、一貫した研究を續けてきた著者の態度に敬意を拂うとともに、東洋史學界にとつても、この大著を得たことは喜びに堪えない。最初に本書の内容の大體を紹介する。本文だけで五六六頁にわたるから、その要點だけの概略を示すにとどめる。

本書は前編と後編に分けられ、前編は南詔國成立史の研究、後編は南詔國史各論とし、最後に南詔國成立年表、南詔王統表を付し巻末に索引、英文目次、地圖二葉を加えて讀者の便に供している。目次の章節だけ揭示すると左の通りである。

前編 南詔國成立史の研究

第一章 大理盆地の歴史 第一節雲南古代の大理文化 第二節張姓部族勢力圏の存在 第三節張姓部族の消長

第二章 昆明盆地の歴史 第一節雲南古代の滇文化 第二節爨姓部族勢力の消長

第三章 唐代雲南の烏蠻と白蠻 第一節唐代雲南の民族分布 第二節烏蠻と白蠻の民族系統 第三節雲南白族の族源問題

第四章 六詔と南詔 第一節六詔の住地と系譜 第二節南詔の民族系統 第三節哀牢後裔傳承の史的考察

第五章 南詔の勃興 第一節南詔の據頭 第二節南詔の大理盆地制覇 第三節南詔の昆明盆地制覇

第六章 南詔王國の成立 第一節南詔の唐朝離反 第二節唐朝の南詔征討 第三節南詔國の成立と吐蕃との關係

第七章 南詔王權の確立 第一節閣羅鳳の王國建設 第二節異牟尋の王權確立

後編 南詔國史各論

第一章 南詔國の支配階層 第一節南詔歷代重臣表 第二節閣羅鳳代重臣表 第三節支配階層の構成 第四節支配階層部族の種族系統

第二章 南詔官制の史的研究 第一節南詔國の中央官制—構成と機能— 第二節南詔官制の成立と史的變遷

第三章 南詔國の強制移民政策 第一節閣羅鳳の強制移民政策 第二節異牟尋の強制移民政策

第四章 南詔國の統治體制 第一節都城の史的變遷 第二節六賧制と六節度制

第五章 南詔國の經濟資源 第一節農業生產の發達 第二節古代雲南の經濟資源

第六章 南詔文化と漢文化—南詔文化の一考察— 第一節雲南經

晉と漢文化の波及 第二節南詔國の漢文化

第一章・第二章はそれぞれ大理盆地と昆明盆地の前史を序章的に叙述したものであるが、いわゆる雲南地方には西方の大理盆地と東方の昆明盆地とがあつて、雲南西部・東部の中心を形成しており、居住民族についても、展開される雲南地方の歴史についてもこの二地が軸となつてゐるとの觀點に立つてゐると考えられる。著者のこの考え方は本書の全體に現われている。

第一章の第一節は昭和三十八年、史朝八二、八三合併號に發表してゐるが、昆明夷、昆明國の説明から始めている。大理盆地が史上に登場する前二世紀から南朝時代に至るまでの間の概観である。とは言え、大理盆地は東晉時代以降ほとんど史上に現われず、著者も言うように五胡時代から二世紀間は缺史時代となつてゐる。したがつて史料に則して研究可能なのは前二世紀から西晉が雲南經營を行う三世紀後半までの間となる。前漢武帝が雲南東部の昆明盆地に據つてゐた滇國から、この西方の大理盆地の中心となつてゐる洱海に向つて經營をすすめてゐた時、この前漢勢力の現われであるビルマルト打通策が昆明國によつて妨げられるのであるが、この昆明國が實は今の昆明市付近をさしてゐず、大理盆地から、この西南方の保山縣（永昌）にかけての地域にあつたことを論じてゐる。三國、晉代に雲南地方を昆明と呼ぶことから（無論、南中とも稱する）、史記西南夷傳などに示された昆明とは今の大理盆地およびこの西南を含んだ地域をさすとしてゐる。そして後に南詔國の主要な住民として唐代史に登場する白蠻種が「おそらく昆明夷や哀牢夷の後裔であつたことは疑いないところである」と述べてゐる。著者はここで馬長壽の最近の説を容れて、唐代の白蠻種の後裔が今の白族

で、これが明清代の民家であり、昆明夷＝哀牢夷＝白蠻＝民家＝白族であると斷言してゐる。そして古代大理文化を形成したものは漢代らしい土着していたこの種族であると論じてゐる。

三頁から四頁にかけて昆明種族と僑種族との相違、昆明種族の經濟を論じるに當り、最近の中國考古學界の成果を調査し、これにより文献史料による論證を補つてゐる點は、説得力増加という効果を生んでいるが、遠い地方に居ても、よく上京の機會を利用して文献その他調査に忙しく努めたことであらうと察せられて、研究の熱意に敬服する。第二節と第三節とを費やして張姓部族について述べてゐる。雲南においては唐代に突如として南詔という國家が現われたように見えるが、前史として有力部族が存在していたのであつて、この歴史的背景に立つて南詔國が生まれ、南詔史が展開されたと強調してゐる。その前史の母體となるものが實は大理盆地を中心に居住してゐた白蠻種である昆明種族であると述べ、この昆明種族が古代大理文化を築いたものとしてゐる。その中の張姓部族が有力であつて、張氏白子國と呼ばれる勢力圏を作つてゐた。それが大理盆地を中心にしたものであるが、前漢時代の昆明國、後漢時代の哀牢國の後に據頭して東方の爨姓部族と對立してゐたと考えてゐる。

しかし張姓部族については史料は稀少で宋代にはなく、ただ僅かに記古滇説や南詔野史系の史書にたよるはかなく、白古記と南詔圖卷とを史料として説明した後に、唐代に南詔蒙氏が據頭する以前、大理盆地を制していたのは張姓部族であつて、白崖城に據つていた張氏の白子國がその勢力圏を示すと論斷し、節をあらためて張姓部族の消長を論じ、六朝期張氏の動向、白子國と張樂盡求、張姓部族の衰退について述べてゐる。著者によれば南中（雲南のこと）の部

酋に姓が見え始めるのは後漢末に早いものが現われるが、一般に南中の諸部酋が姓を用いるようになるのは三國時代頃からである。華陽國志南中志の蜀漢の張裔、蜀郡太守健爲張翼などを例示している。大理盆地は昆明盆地よりも史料乏しく、歴史は分明し難い。漢人帝國の勢力が巴蜀方面から南下して今の昆明方面にまず波及するが、この西方に山岳をへだてて存する大理盆地まで延びていくことは容易なことではない。著者によればそれは隋代に漸く現われ、隋唐の征討軍に抵抗した西洱河諸蠻の中の最有力部族が、張姓部族であったと考えている。唐代に張樂進(盡)求が大將軍雲南王に封ぜられたこと、開元後半期に南詔が勃興してくるのは張氏政權下の有力部酋であった蒙氏が、大理盆地の制覇權を張氏から奪うことを意味していると説明している。そして東方の昆明盆地にあった爨姓部族が天寶期まで榮えたのと對比し、張姓部族が早くも初唐から衰え始めた理由について考察している。

第二章は昆明盆地の前史であるが、全部出版に當って付加した未發表のものである。最初に靡莫夷と滇國とについて論じ、ついで滇文化の形成について述べている。雲南地方東部の昆明盆地が歴史に現われ始めるのは西方の大理盆地と同じく前二世紀であるが、著者は史記西南夷傳を引いて、文中の靡莫之屬が昆明盆地東半部を漠然とさしており、靡莫之屬の最大の部酋が滇國王であったとし、この靡莫之屬の民族系統にふれ、おそらく西方大理盆地の昆明種族と同系統の唐代の白蠻種に含まれるものと考えている。滇國には既に戰國時代の楚の文化が流入しているが、著者は史記西南夷傳を引いて滇國の最盛期が、漢の使者がはじめて滇王嘗羌に會った元狩元年(前一二)頃に當り、前八六年以降に衰えやがて史書から消えて

しまうと説いている。文化方面では滇國は位置が大理盆地よりも中原に近いから、歴史時代に入るのも大理盆地よりも早く、漢文化も巴蜀地方から南溪路ぞいに早くから南下してきたことを述べ、秦漢時代から巴蜀人と西南夷との交易が行われており、馬、牛、奴隸など賣買された事實にふれ、農産も豫想以上にあり、礦産も豊富であったと説いている。

既に前三—二世紀頃に昆明盆地では住民は定住農耕社會を形成していたのであり、階級社會の出現とともに滇國王のような豪酋による富の集中が行われたと論じている。この昆明盆地の古代文化—滇文化—に關する論證に著者は文献のほか、最近の石寨山古墳群發掘報告を使用し考古學の研究成果を利用している。

第二節ではこの地方の住民であった爨姓部族勢力の消長を論じ、爨民の壘頭、隋代爨姓部族の動向、唐代前半期の爨姓部族について述べている。六朝初期から頭角を現わした爨氏が雲南東北部の曲靖盆地を中心に、しだいにその勢力を昆明盆地に擴大し、六朝後半期に雲南東部の實權を握る大部酋となり、王國形勢の氣配さへ示している。やがて隋朝の巴蜀平定後に行われた雲南地方への進出と經營とによつて一時的に大打撃を蒙つたが、依然、爨氏一族は其餘勢を保ち得て、唐朝の編廢政策によりその勢力は溫存された。吐蕃の南下があり、唐の雲南經營が後退して、武后時代に爨氏の勢力は増大し、玄宗期には昆明盆地一帯に盤居する一大勢力圈を形成していたことを概観している。これについて著者は唐初から早くも衰微していった大理盆地の張姓部族と對照的であると指摘し、天寶初年の爨氏一族の繁榮は眼を見張るものがあると述べている。讀んで興味をそそられたのは唐の劍南節度使が經營した紅河にそつて東南下し

ハノイ方面に出る歩頭路（安南路）である。私は雲南地方には地域としての核が二つあって西部の大理と東部の昆明がそれであるが、雲南地域の東部の核となっている昆明付近の地は巴蜀地方とハノイ方面との間に地域的關連性が強く、こういう觀點に立つてもう少し昆明盆地に關する研究がはしかつた。たとえ八五—八八頁にある著者の論述を讀んでも、なおさらに詳述が望まれる。しかしこれはおそらく私の立場と著者の立場の相違からおこることでもあり、紙幅の關係があつたのかも知れない。

第三章は唐代の烏蠻と白蠻についての論考である。まず第一節に唐代雲南の民族分布を述べるが、最初に雲南地方諸民族の民族系統について最近の學說を整理して紹介し、ついで唐代雲南の住民を二大別して西爨白蠻と東爨烏蠻とに分ち、西爨白蠻の分布範圍は今の昆明市を中心として西方は安寧、祿豐兩縣、南方は晉寧、澂江兩縣、東北方は嵩明、曲靖、霑益等の縣を含む地域であり、東爨烏蠻の分布範圍は昆明盆地東北部の曲靖、尋甸兩縣、東部の師宗、瀘西、彌勒等の縣、南部の建水縣、江河沿岸地方まで含んだものであると言ふ。そして別項をたてて、唐代の烏蠻と白蠻について考察を加え、西爨白蠻、東爨烏蠻は決して種族名として使用された語句ではなく、西爨には白蠻が多く、東爨には烏蠻が多い意味を略記したものにすぎないと考え、烏蠻と白蠻、東爨烏蠻と西爨白烏が混同して使用されている點を指摘している。

大體、著者によると、烏蠻種は雲南の北境、東北境、東境の山岳に居たが、これはチベット系と考えているから、四川省宜賓縣から雲南省麗江地方に至る間、金沙江北岸にも分布して相當な廣範圍にわたつて居住していたと考えている。これに對し白蠻種は曲靖盆地

から昆明盆地に至る間を中心に住み、水稻耕作する定着農耕民であるが、がんらいは西方大理盆地方面に住んでいたものとしている。

そして白蠻種は唐代には大理盆地にも昆明盆地にも、この間の山間低平地にも居住していた農耕民であると述べている。ここらあたりに地圖一葉を挿して烏蠻、白蠻兩種の概略の分布圖でも示してもらつたら解り易い。第二節は烏蠻種と白蠻種の民族系統について論じたもの。まず兩種の生業、習俗、言語について述べている。ここで著者は烏蠻種獨特の鬼主について簡単にふれ、白蠻種に鬼主制度のないことに注目している。兩種の民族系統については著者は、早くもベリオがふれ、最近は凌純聲、白鳥芳郎氏などが主張しているように烏蠻種はチベット、ビルマ語族に屬する種族であるという見解を肯定している。白蠻種については凌純聲、松本信廣、白鳥芳郎氏の說を紹介し、さらに牧野巽氏の最近の民家語と蠻書に含まれている白蠻語との比較研究の結果をも述べ、唐代に稱される白蠻は今の民家と同一種であるとする見解が、これら諸學者の說の共通點であることを指摘している。白鳥說によると白蠻語はタイ語であり、白蠻とは實はタイ族であるが、これについて著者は「今、にわかに賛同し得ないものがある」と言ふ。

白蠻種の民族系統論はきわめて複雑である。

著者は第三節に雲南白族の族源問題を論じ、新中國史學會の研究動向、および雲南史學會の最近の研究成果を述べ、向達、陳碧笙、王叔武の說を通觀して、白族が今日の彝族、史上の氏羌系種族であるとする點が共通して一致していると述べ、他方、雲南史學會では氏羌族系統、多種族融合說、雲南土著民族說、漢族系說があつて論争されていると報告している。そして新中國においては最近、白族

の漢族系統論がさかんになって、史上の雲南地方への漢文化の流入が目ざされている反面、僚族説を唱える者が一人も居ないと論じている。ここまで読んでくると、前に、にわか白鳥説に賛同できなかった著者の氣持がよく理解された。望蜀の注文にもなり、筆者自身も充分でないから言い難いことではあるが、新中國史學界の動向からだけで、日本の諸家の説に對して態度を決めないで、言語に對してはある程度の言語學から、人類學上の説に對しては人類學の知識の立場から著者独自の反論が展開されていれば心強く感じられるであろう。ともかく著者指摘のように最近の中國人學者の説は日本の白鳥芳郎説などとは全く對照的で、たとえ新中國の政治の反映を考慮に入れても雲南史研究において残されている大問題である。

この第三章は第一、二章に比較して迫力ある内容を持っている。

著者の大學卒業以後の研究から見ると、昭和三五年頃から注目しはじめた新中國學界の動向、言語學人類學考古學など關連諸科學の研究成果を吸収した新しい論考のせいでもあるであろう。

第四章は六詔と南詔であるが既發表論文に未發表のものを付加してある。第一節に六詔の名稱、六詔の住地、六詔の系譜について論じている。住地についてはA・B・Cの三表を作製して諸説を紹介しているのは讀者にとって理解に便である。結局、著者は六詔は古代昆明邑落集團の經濟文化の上に形成された六個の政治集團であること、蠻書に「六詔并烏蠻」とあるのは六詔の詔主が烏蠻種であるという意味で、詔主の下の人々がすべて烏蠻種であるという意味ではないとし、六詔の中、蒙舍（南詔）と蒙巒の二詔下の住民は烏蠻種に屬するが他の四詔の主要住民は白蠻種であったとする馬長壽の説に賛成している。そして南詔の民族系統を論じる場合、南詔王族を

中心とする南詔蒙姓部族の問題と、南詔國を構成する主要住民の問題とは別に分けて考えねばならないことを強調している。著者は南詔蒙姓部族は一般に烏蠻種であるとの見解が有力であると言い、自分もその一般的見解に賛意を示し、南詔蒙氏—烏蠻種—羅羅族説を説く白鳥説を再確認している。これに對し南詔蒙氏支配下にあった南詔國の主要住民は白蠻種であったと述べ、これは本書のいたる所でくりかえし主張している。

第五章は南詔の勃興を論じたものである。全部が刊行に當り付加された未發表の内容であるが、續く第六、七章とともに、南詔國が唐代に成立し、その王權が確立されていくその歴史的經過をあとづけたものである。この章ではまず南詔が蠻頭し、支配者となった蒙氏の始祖から初代に至る間の史傳について述べ、南詔の建詔（詔とは王の意味、建詔とは部族長を中心に集團の結合がされることを言う）と遜位傳承（張姓部族から蒙姓部族に支配權が移讓されることに關しての傳承）について述べている。著者の考えでは六詔が建詔したのは大理盆地を中心に成立していた白蠻種勢力圏であった張氏白子國衰退以後で、張氏白子國の衰退は貞觀末年、永徽初年頃における唐軍の大征討により決定的大打撃を蒙ったからであるとしている。そして六詔の中、もっとも早く建詔した蒙舍詔の建詔は永徽元年（六五〇）をさかのぼらず、他の五詔の建詔はさらにこれより遅れて七世紀中期以降であるとする馬長壽説を採用している。要するにかつて張氏の支配下にあった部酋の蒙氏が擡頭してもっとも有力な部酋となり、永徽四年（六五三）頃にまず蒙舍詔が建詔し、次代の羅盛の時に張氏政權が瓦解し、これに代つて大理盆地南部の實權は事實上南詔蒙氏によって把握されたのである。著者は遜位傳承から

推して實際に張蒙兩氏の勢力交替の時期は六七八年前後頃かと推察している。また研究結果を表化し、南詔國成立期蒙氏世系表を作製している。

著者は南詔蒙氏の擡頭を論じて唐の太宗、高宗の頃の張氏支配時代には部酋の中で、烏蠻種は南詔蒙氏だけであり、他の部酋である張、楊、段、趙、李、王の七氏はいずれも白蠻種であり、大理盆地に古代から據っていた白蠻種が基盤になってその上に張氏の支配權が立てられていたと述べ、したがって張氏に代って支配した南詔蒙氏の南詔國も、その實體は從來の白蠻種が基盤となつていと述べている。このあたり前後一貫した論述をして史論明快、南詔に関する著者の研究中、もっとも重要點であるだけに相當の自負と自信とを行間に感ずる。ついで南詔の大理盆地制覇を述べ、第四代皮邏閣の時、開元後半期に入ってから勢力が急に發展し、大理盆地南半部を制するようになる経過を説明している。それは唐の雲南經營の進展と相呼應して北隣の白蠻種を抑えていくもので、ちょうど吐蕃勢力が南下して唐の雲南經營を妨げる時期に當つてゐることを指摘している。ここで西洱河諸蠻の討平を開元二年（七三三）として一つの劃期ととらえている。ついで南詔の昆明盆地制覇を爨姓部族の内部事情、南詔の對爨姓部族政策、唐朝雲南經營の動向と南詔の三項に分けて述べ、南詔が開元二五一年に大理盆地を制覇して後十年間を経て天寶八年（七四九）唐軍が雲南大征討を行ない、これが南詔の昆明盆地支配の絶好の機會となつたと述べている。

第六章は南詔王國の成立を論じる。はじめに南詔が唐朝から離反していく経過を説くのであるが、まず天寶九年（七五〇）に生じた雲南太守張虔陀事件をきっかけにして南詔がはじめて唐に武力的反

抗を試みたこと、離反の歴史的背景として、南詔は機會さえあれば唐の羈絆から脱して獨立することを希求していた事情があつたと述べている。第二節の唐朝の南詔征討は天寶十年（七五一）に行われた第一回の征討が失敗したこと、天寶十三年（七五四）の第二回征討も失敗したこと、この失敗の唐朝側における原因を考究し、南詔側が意氣軒昂であり、當時の王閣羅鳳が歷代南詔王中第一の武勇ある人物であつたと述べている。續いて南詔と吐蕃との關係について検討し、まず吐蕃の南下と南詔の動向にふれ、吐蕃勢力が大理盆地に浸透してくると、これと呼應して反唐的になつたこと、これまで南詔が親唐的であつたのは他部族の動向を見ながら獨立の機會を俟つていたものであると言う。この解し方は著者が結果論的に歴史的解釋を施したように筆者には思える。

著者は吐蕃と南詔とが接近していく關係を述べて德化碑文を引きながら、南詔が天寶十一年（七五二）一時的ながら唐側の支配から脱するために吐蕃に臣付したことを敘し、唐軍の二回にわたる征討の際に吐蕃が南詔に援兵をおくたが、天寶十四年（七五五）安史の亂がおこると唐勢力は後退し、吐蕃が嵩州方面から唐勢力を驅逐するようになり、吐蕃は南詔を利用しようとするようになってきた経過を説いた後、吐蕃の重壓をはねかえして貞元十年（七九四）六代異牟尋の時に事實上獨立して南詔國が成立したと論じている。

第七章は南詔王權の確立であるが、ここではいかに異牟尋が、その當時、複雜であつた南詔、吐蕃、唐との關係に當面しながら南詔國の獨立を完成していったかを考察するために、まず第五代閣羅鳳の王國建設事業を述べ、六代異牟尋が吐蕃に反して再び唐に付したこと、貞元九年（七九三）には吐蕃軍を破り、翌年正月獻捷使が長

安に到着していること、今の劍川縣付近住民を強制移住させて大理盆地の東北を確保したこと、また姚州、磨些等の地方の白蠻種を大量に東方の昆明盆地に強制移住させたことを述べている。以上が前編の内容の概要である。

後編はさらに簡単に紹介することとするが、第一章南詔國の支配階層は、南詔國の重臣表を作製し、この表を基礎にして支配階層の構成と支配階層部族の種族系統とを論じたものである。著者は唐會要南詔蠻傳、兩唐書南蠻傳、蠻書、資治通鑑唐紀、冊府元龜外臣部太平御覽、南詔德化碑文、南詔圖卷、胡本南詔野史等を史料として南詔歷代重臣表を作り、その資料的意義について述べ、さらに南詔德化碑の建碑事情と德化碑の史料的价值を論じた後に、この德化碑の碑文面と碑陰銘だけを史料として閣羅鳳代重臣表を作製している、前の南詔歷代重臣表は六代異牟尋以降、大理國に至るまで王名を上欄に列挙し、縦欄に姓を大別し、表中には歷代ごと重臣名とその出身部族が解るようにしてある。後の閣羅鳳代重臣表は前表以外の姓も欄に書いてある。そしてこれらの重臣表は「南詔史研究に重要な役割りを果し得る」と断言している。これは自信の現われであるが相當苦心したあとが窺われる。そして表を検討した結果、支配階層を構成していた主な部族は楊、段、趙、王、李、尹、張、洪、杜、董、爨の十一姓でこれにならぶものとして漢人系の鄭氏、王族である蒙氏が存在に注目している。またこれら支配階層を構成していた諸部族の住地と種族系統を考察して、南詔國の主要な役割を果していた第一等グループは楊、段、趙、王の四姓、第二等グループは張、李、尹の三姓、第三等グループは董、洪、杜、爨の四姓であり、合計十一姓としてある。そして豫想以上に白蠻種系大姓出身者

が多く南詔國の重臣となっていることを注意している。著者は支配者である南詔蒙氏が烏蠻種であるのに、どうしてこんなに多く白蠻種出身が重臣となり烏蠻種出身者が少いかという問題についてはこたわらなければならないとし、その理由をきわめて簡単に付記している。ここらがまた筆者は非常に重要な所であると思うし、著者の如く簡単に片付けていいものかどうか、問題として残ろう。

第二章は南詔國の官制について論じたもので、かつて發表したことがある論文である。中央官制の説明からはじめ、清平官系の官、僧望系の官、大軍將系の官に項を分けて論じ、それぞれ表を作つて理解の便に供している。そして節をあらためて南詔官制の成立年代にふれ、五代閣羅鳳の時代に中央官制の骨格ができ上り、六代異牟尋の在位前半期に改編整備されたと言う。その後十代豐佑の頃から官制に大きな變化が現われてくるが、著者はこの現象は烏蠻系の南詔が白蠻化していく史的傾向に合致するものとして把握している。

第三章は南詔の強制移民政策について述べたもので、全部が未發表の論考である。五代閣羅鳳時代、六代異牟尋時代に南詔は劇的に發展し獨立國を形成したが、この場合、國內體制を強化していくとともに、大規模に強制移民を行なった。農耕民を大量に移住させて邊境の農業生産の増大、外敵侵入への防備にあてている事實を詳述している。すなわち閣羅鳳時代に白蠻民を會川地區（今の會理縣を中心とした地域）に移住させているが、移住を強制されたのはおそらく大理盆地東方の姚州（今の姚安縣）地方の白蠻種住民であるという。また、この時期に西爨白蠻二十萬戸が雲南西境の永昌盆地（今の保山縣が中心）に移住させられたが、これは南詔に對立する最大勢力であった昆明盆地の西爨白蠻を打倒した直後に強制したも

のである。地圖を開いて著者の論述と照合していると、雲南東部の昆明盆地から雲南西境の保山縣付近まで西爨白蠻二十萬戸が移住させられたと思うと、その大規模なのに驚くほかはない。この考察に當って華北の五胡時代の徙民政策と比較して論じたならばさらに突込んだ考察が得られたかも知れない。

ついで異牟尋時代に行われた昆明盆地への農耕移民、雲南西部への移民開拓について述べ、閼羅鳳時代の強制移住は王國建設に際して、對立する部族を強制する意味で行ったものであり、異牟尋時代のそれは王國完成期における對立部族の禍根一掃、中央集權確立、農耕開發を期したものと述べている。

第四章は南詔國の統治體制を述べているが、最初に都城の史的變遷を掲げ、建國以前の居城であった蒙舍城について説明し、ついで建國期の居城である大和城について述べ、ここで大理盆地城寨關係圖を一葉を入れてある。そして六代異牟尋以後都城であった今の大理市にあった大理城（陽苴咩城）の築城と唐の大曆十四年（七七九）、この城に異牟尋が遷都した事實を述べている。また昆明盆地にも唐の永泰元年（七六五）に、東都拓東城が設けられたこと、この名稱が後に善闡城と改名されたことにふれている。第二節に六賧制と六節度使を述べるが、六賧制というのは南詔國の畿内に設けられた六州制のことをいう。地方には六節度二都督制が布かれ、六節度の名稱と位置とを説明し、「唐制の模倣らしい」と述べている。第五章は南詔國の經濟資源を論じたもので、最初に農業生産を述べている。唐代の斷片的な史料ではあるが、雲南地方に農業が發達していくあとづけを行ない、南詔國の農業は水稻が主體で、麥類はか粟、豆、黍、稷などの主穀類が主な産物となっていること、農家

は牛その他の家畜を飼育し、連作技術をとまなう多角的經營をする役畜農業が廣く行われていたとしている。ついで古代雲南の畜產資源、鑛產資源、特産物について述べているが、著書その他の史書に見える金銀貴金屬の產出は注目せねばなるまい。

第六章は南詔に波及していた漢文化を論じたもので、漢、六朝期の漢文化波及、唐朝雲南經營と漢文化波及を述べた後、南詔國の漢文化攝取、そこに展開された漢文化にふれている。そして王室を頂點とする支配階層には強い漢文化の影響が見受けられるが、一般住民にどれだけ漢文化が及んだが、具體的に把握することが困難であると結んでいる。以上が後編の要約である。

最後に紙幅を慮って氣付いた點を切りつめて若干付記しておく

最近の北アジア史の研究その他の分野における東洋史學界の研究動向から言えば、本書にもう少し、雲南史を具體例とした中國邊境史において展開されていく各民族の氏族制社會、部族制社會、これらが結合して史上に現われてくる國家の、歴史的な考察をするという考えを強く盛り込んでもらいたかった。支配權の頂點に立つ南詔蒙氏と特殊關係を結んでいた部族は一つとして史料上に現われてこないのか、（匈奴・突厥の場合はある）南詔國內の支配者的立場をとる部族と、この支配下に立つ被支配層としての部族とに分けてさらに検討する手がかりが、これ以上に得られなかったのか、また各部族ごとの部族構成について本書中屢々「部酋」を重視した著者の考えは滲み出ているが、部酋と部族の一般成員、さらに水準下におかれていた者はいなかったか、などについて一層、詳細に知りたいと思う。なるほど著者も言うように史料少く缺史時期もあり、筆者の

希望は無理かも知れないが、少くとも、南詔國をそれ以前、昆明國以降、南詔國以後の雲南史全體に位置づけて觀る視角が必要である。この視角は著者にあるにはあるが、前述のようにさらに強く部族構成、國家へ發展していく場合の部族相互關係、支配權との關係に立つて巨視した上で、南詔國の構成様態の歴史的意義を論じ、史上の位置づけに關する見解を示してもらいたかった。筆者は三八八頁に書いてある著者の付記だけでは不安であり、三八九—三九〇頁にある南詔官制の史的考察も著者はこれらの考えを無論念頭に留めて、社會史的考察への手がかりとして行なっているが、もっとも重要な、研究上の基本的問題と思うので、今後さらにこの方面に注意を拂って研鑽の深化を願いたい。内容紹介のついでに述べたが九八—九頁にある烏蠻種特有の鬼首制度などこの意味で好い史料上の手がかりと思う。

つぎに地圖について注文するならば卷末二葉の地圖と本文中に挿入されたものはそれなりに意義を有しているが、卷首に總圖的な一葉が必要と思う。雲南はインド、ビルマ、ラオス、ヴェトナムに接し中國の一部とはいえ、ある種の國際的性格を交通交易史上有してきた地域であるから、成都、ハノイ、イラワジ川中流域、ガンジス川中流域、金沙江流域など含んだ地形圖を一葉掲げておくと、讀者は南詔國を理解する上で便利であると思う。さらに細かいことであるが著者の研究上重要地名であるから述べておくが、本書中、いたる所に僑と僑とを混同して僑と書いてある。成都の西南方、大凉山の西側、今の西昌縣は唐代に越州と呼ばれ、治所があった。一般に古代ではこのあたりの地を越と呼ぶ。新唐書地理志に越州はあるが僑州というのではない。著者は史記西南夷傳その他の史書

の原文を引用しても全部誤って僑としてある。この誤字が書物全體にわたっているのはきわめて残念なことで、玉に傷の感があるのは筆者のみでなからう。引用文に所々、中略してある部分で、短文であるから省かず引用して示しておくほうがよい所が多い。たとえば一二九頁に引用した新唐書南蠻傳上は中略した部分は「蜀諸葛亮討定之」の僅かに七字で、意味上からでも書いたほうがいい。この引用文で南女王國とあるのは南女王が正しい。二八七—八頁に通鑑を引用してあるが、閭羅鳳のつぎに遣使の二字がぬけており、屍は尸が正しい。これらの細かいことは事情があったらしく、出版時にきわめて多忙を重ねていたと見受けられる著者の校正もれかも知れない。

東洋史學界において未開拓であつた雲南史に一貫した研究の努力を續け、斯界が今、貴重な著者の研究の結晶を得たことは著者ならびに同學の士とともに欣快の念を禁じ得ない。特に着實に漢文史料に則し、史料批判した上で考證していく態度、南詔國史を、たえず最近の中國史學の動向や、考古學、人類學、言語學などの関連諸科學の研究成果を攝取して、必要のある學說を紹介し、これについて自己の見解を示しながらみごとにまとめあげたことは賞讃に値する。著者は屢々、本書において史的考察ということばを好んで用いている。南詔國史の研究に當つて、たえず歴史家として、南詔國の歴史的背景を追求している態度は行間に溢れて、東洋史學の學術書としての風格を備えている。未發表の内容が相當多くあるのは、これまでに著者の机側にたまった原稿であらう。著者の研究は初期においては唐朝の雲南經營や漢文化の波及、雲南の資源など多かったが昭和三五年頃から海外の研究動向、関連諸科學の研究成果の攝取に注

意しながら官制や族源問題と取りくんでいる。中斷または集中することなく、研究は同じペースで持續して今日に至っている。今後の研究の深化と、一層の發展とを祈念したい。最後に舊交の好みにて遠慮なく言評したことに付き、著者の諒恕を請うらうのである。

(前田 正名)

清末の秘密結社 前編 天地會の成立

佐々木 正哉 編

昭和四十五年十二月 東京 巖南堂書店
B5判 二五六頁

本書は、著者が最近巖南堂から出されている一連のシリーズ、「中國近代史研究資料」の一つとして刊行されたものである。著者が中國近代史の研究に精力的に取り組まれていることは周知の事實であるが、本書に即して述べるならば、著者は本書の出される以前すでにロンドンの公文書館に赴いて天地會關係の資料を収集し、『清末の秘密結社(資料編)』として公刊されている。又著者は阿片戦争、清末の排外運動についてもすでに資料集を出しておられる。

本書の意圖は、著者がはしがきの最後にも書いておられるように、反清復明を目標として設立された天地會の起源を明らかにすることに置かれ、その方法としてまず天地會自身が持っていた起源説話を明らかにされ、それに對する専門諸家の解釋を批判的に検討され、次いで天地會の名が初めて世上に現われる機縁となった林爽文

の叛亂とその當時の清朝が行なった天地會起源についての調査を考察され、更に康熙から乾隆年間にかけておきた各種結社の叛亂や事件と天地會との關連を比較検討され、天地會の起源を追求しておられる。本書の構成は次の如くである。はしがき、第一章天地會傳承の考察、第一節反清復明根苗、第二節起源説話の解釋、第二章林爽文の叛亂と天地會、第一節林爽文の叛亂、第二節天地會起源の追求、第三章天地會成立の背景、第一節天地會以外の各種結社、第二節天地會出現の背景である。さて、本書を章を追って所感を加えながら紹介して行きたい。

第一章第一節の反清復明根苗から見て行く。著者は天地會の起源を考察するに當って、まず天地會自身の傳承である「反清復明根苗」とか「西魯序」などの説話を取り上げ、それらが由來する文書を擧げ、その異同を明らかにすることにより、これらの説話を再構成し、その中から天地會の起源に關する史實を取り出そうとされた。

著者の依つた文書は、反清復明根苗(羅爾綱編著、『天地會文獻錄』、貴縣修志局發現的天地會文件、一一三頁)、西魯序(同書、守先閣本天地會文件四一四三頁)、西魯叙事(蕭一山編、『近代秘密社會史料』、卷二、一一三頁)、西魯序(同書、卷二、三三七頁)の漢文文書であり、これらを比較検討した上、更に英譯のシュレーヘル譯『洪門黨史』、ピッカリング譯『天地會の起源』、スタントン譯『三合會起源傳説』、スターリング譯『洪門傳説』、モーガン譯『傳説三合會史』を参照されている。さて著者はまず「反清復明根苗」を紹介し、その上に諸文書を参照して天地會の成立年代、少林寺の所在、天地會成立に當つての登場人物などを比較検討し、ついで西魯敘事を紹介し、それがシュレーヘル本の壓縮であることをつぎと